

注) ゴシック体で記述されているものは、外部評価(学校評議員、PTA執行部及び学年選出役員)です。明朝体部分は、職員による評価です。

1 『樹木(グランドデザイン)の年輪(幹)となる教科の学習・ときめき学習・特別活動・道徳等の教育活動を実践して成果の見られた具体的な内容』

(1) 一人一人に確かな学力を付ける「教科の学習、ぐんぐんタイム、T・T」

A 基礎・基本の定着

- 6 学年の習熟度別学習が基礎・基本の定着に効果的であると思う。とりわけ、じっくり学びたい、どんどん学びたいグループの子にとっては、従来のクラス単位での学習よりも進度を合わせやすく、基礎学力の定着に効果を発揮している。
- 4 学年は算数を習熟度別、少人数で学習してきた。人数を減らし、習熟度別に学習をすることで子どものつまずきに対応できたと思う。特に、割り算の筆算の仕方は、何度も繰り返して取り組み、時間を見つけて子どもの様子を報告しあったので、一人一人のつまずきに対応できたと思う。
- 算数では、単元に応じて、一斉指導、T・T、小集団学習、習熟度別学習を行った。小集団学習、習熟度別学習では、児童一人一人に目が行き届き、つまずきを発見することができた。つまずいている児童を中心に個別指導し、理解させるようにしてきた。ターゲットの正答率は、ほとんどの問題で80%を上回った。
このように、様々な学習形態で学習が行えるのは、副任がいればこそである。
- 漢字テスト・計算テストを目標にして一生懸命に練習する子どもが多かった。字形は正しく書いても、筆順が正しく覚えられないこと、送りがなの間違いが多いことを受けて、それぞれの学級で指導してきた。
- 計算テスト、漢字テストに向けて、ほとんどの子が集中して練習や学習に取り組んでいた。早めの範囲提示と日頃からのミニテストの実施で、もっと定着を確実なものにしていけると考えている。2 学期への課題にしたい。
- 学習したことの習熟を図るため、自主学習の習慣化を図った。
- 自主学習の定着に向け、指導してきた。その結果、ほとんどの児童が自主学習に取り組めるようになった。特に漢字は、プレテストや練習プリントを行うことなく、自主学習で身に付けた児童がほとんどであった。漢字テストでは、2 回とも平均点が90点を上回った。宿題以外に学習するという習慣ができつつある。
- 自主学習を続けてきたことによって、自分で学習してできるようになる喜びを感じている子どもがいる。漢字や計算テストの後、「自主学習をやってきたから合格できた。」と感想を書いていた子が数名いた。
- 学級の時間を週2回、学習の時間にした。学年で共通に決めたため、子どもたちも最初から抵抗なく学習に取り組んだ。答えとセットのプリントを配布し、自分で付けをするようにした。
- 各学年の実態に応じて、国・算の具体的な取り組み計画を立てた。授業や学級だより等から授業始めにマス計算を継続実施したり、朝活動に漢字と計算練習を位置づけて行ったり、日記指導の継続を実行したりしていることを知った。取り組みの進捗状況の報告会はこれからであるが、それらの実践から定着の状況を聞きたいと思う。
- 100マス計算の速さも1分以上は向上した。既習の漢字を思い出す機会にもなった。昨年度2 学期の学校評価の中で基礎・基本こそスパイラルに取り組む必要があるとの記述があったが、それを実現できた。自ら学習する習慣も付いた。漢字力テストや計算力テストの前にはそのプレテストを行うことになった。漢字力テストなどは、昨年度に比べて平均点が5点以上向上している。
- 漢字ミニテストを毎日行った。4 月当初は5問～7問で始め、6 月から10問に定着した。マンネリ化を打破するため、6 月下旬から正解数による位置付けをし、教室に掲示した。(10問正解-神様、8～9問正解-王様など)自分がどこにいるか把握することで学習意欲が更に向上した。また、解答を板書するとき、子どもと一緒に筆順を確認しながら行った。(漢字テスト1回目85.6点、2回目89.3点)
- マス計算を4 月から取り入れたが、差がとても激しく試行錯誤しながら行っていた。速い子は25マスのかけ算で40秒、時間のかかる子は5分でも終わらない。そこで、『25マスから始め

て合格(5分以内で全問正解)したら次の36マスへ上がることができる。』というように段階を設定した。子どもたちは早く100マスに到達したいと、意欲と集中力がどんどん向上した。計算スピード・正解率も4月当初より驚くほど向上した。

- ・ 基礎・基本を定着させるためには学習環境を整えることも大事な点である。物的な教室環境と学習しやすい雰囲気作りに努める必要がある。
- ・ 計算の技能は、十分身に付いてきている子どもが多い。計算テストの平均点は90点を超えた。また各単元末で実施するテストも全国平均点を上回っている。
- ・ 国語のみならず、様々な教科や活動の中で、互いに伝え合う活動を取り入れてきた。国語では、相手に話をするときや相手の話を聞くときに大切にしたいことを基礎技能として指導してきた。相手を意識した対話は十分にできないので、引き続き指導していく必要がある。
- ・ 2学年は、毎日連絡帳に日記を書いていた。その日一日を振り返り、心に残った出来事について、自由に書く。分量に決まりはないが、「長く書けるようになりたい」という思いから、短時間(10~15分程度)に5ページ以上書く子も出てきた。授業で学習した内容(順序に気をつけて書く、「」を使って会話文を書く、新出漢字など)を生かして、文章を書ける子も多くなってきた。担任が一人一人の書く文章を読んで、表記の誤りを直したり、感想のコメントを書いたりしてきた。これにより、子どもたち一人一人の文章表現に関しての見取りがより細かくでき、個別指導に生かすことができた。また、担任が気付かない子どもたちの心理や、行動についても把握でき、生活指導面での指導にも役立った。毎日の積み重ねは、確実に一人一人の文章表現力を高めることができていると感じる。7月に行ったテーマを決めて思いを文章に表す活動(例えば、友達へのメッセージ、1学期を振り返っての作文など)で、担任が指導・修正する必要がほとんどなかった。
- ・ 国語の取組:「たくさんよもう・かこう・はなそう」を合い言葉に取り組んだ。

・ 様々な場を捉えて音読、読書、スピーチ、活動後の書く活動

成果:全員が清音を読む、書くことができるようになった。

読みながら指で文を追えるようになってきた。

音読では4月当初は拾い読みが多かったが、言葉として意識しながら読むことができる子がほとんどになった。

物語文、説明文は絵や、写真を参考にして、文の内容の大体を理解することができた。

課題:濁音、半濁音、拗音のうち、教科書で習わない言葉ではまだ読めないものが多い。教科書で習った言葉では読むことができるので、教科書に出た時を捉えて指導することが必要である。

文だけでは内容を読みとるのが困難な児童が5名、テストやプリントの指示文の意味が理解できない児童が10名いる。

作文における言語事項の定着は、まだまだである。書き言葉と話し言葉の違いがしっかり指導できなかった。機会を捉えて継続的に指導を行う。

- ・ 算数の取組:「いくつといくつの学習」「10までの足し算」では、学年態勢で練習の機会を増やした。家庭との連携、ぐんぐんタイムで習熟を図った。昨年度の課題を受けて、長さの学習ではつまずきやすい所を事前に検討して、取り組むことができた。

成果:ブロックやおはじきの操作活動が正しくできるようになった。

指を使わなくても、足し算ができる児童が増えている。

足し算に自信を付けた児童が多い。

課題: $3 + 4$, $2 + 6$, $3 + 6$, $2 + 7$ など特定の数の計算について誤答が目立つ。

誤答傾向を見て今後の取組に生かす。

個人差が大きいので、関連単元の前に復習を繰り返す。

- ・ 音楽

授業を通して、明るくのびのびと歌い、表現する子どもを育てたいと考えて指導にあたってきたが、まだまだ不十分であり、思うような成果を上げることができなかった。特に、高学年は思い切り声を出そうとせず、歌声が響かない。高学年の歌唱において、心理面や発声など発達段階で現われる課題を解決することの難しさを痛感している。音楽の授業の工夫はもとより、学級朝会、終会など、生活の中で歌う機会も増やし、声を出すこと、歌い慣れることにより、歌う楽しさを感じ、生き生きと歌うことが出来るようにしていきたい。

器楽の技能は、中学年を中心にかなり定着を図ることができたと思う。様々な楽器に親しみながら、合奏を楽しむ姿がみられた。限られた時間の中ではあるが、できるだけ個々の実態をつかんで、個別指導の必要な子どもたちへの支援も行うよう努めてきた。

高学年も合奏には、意欲的に取り組んでいた。学習を進める中で、リコーダー合奏や大編成での合奏をやりたいという声が聞かれた。

- ・ 図工が一時間ずつになっていたもので、準備、後片付けに時間をとられてしまい、十分に子どもの様子を報告する時間がなかったのが残念だった。

- ・宿題があるときは机に向かっているが、自分から進んで勉強するといったところがないので、毎日宿題を出していただきたい。
- ・生きる力の現状と課題の中、「教師の教え込む姿勢が強く、児童は教師の指示を待っていることが多い」とあるが、グライダーもある程度まで引っ張ってあげないと飛べない。引っ張りすぎてよく飛べない。その辺の程度が難しい。
- ・毎日の宿題が少なくともあり、家に帰ってしなければならないという意識があり、よいことだと思う。やはり、小学校での基礎が大事だと思う。これが分からないと、中学校に行ってもやはり分からないままで過ぎてしまう。
- ・自主学習をしているが、本人が怠けたときと一生懸命したときの差に気付いた。いろいろなことに興味をもち、自分から調べたり挑戦したり心も体も成長してほしい。

B 学ぶ喜び・分かる楽しさを感じる授業

- ・算数では、全単元を通して具体物操作などの算数的活動を取り入れた。習熟度別グループや少人数グループでの学習が中心だったが、教科書を基本としながらも、より楽しく分かりやすい授業を目指して、各グループの担当者が切磋琢磨しながら教材研究に取り組んだ。
特に力を入れた「わり算」では、児童の日記の中で「筆算のやり方がよく分かって、算数が楽しくなった。」「難しい問題でも、よく考えれば分かるということに気付いた。」などの記述が見られた。算数アンケートでも、「算数の学習がよく分かるか」との問いに対して、全員が「よく分かる」「だいたい分かる」のどちらかに回答していた。
- ・算数の小集団学習では、グループの実態に応じて活動を工夫し、操作しながら理解できるようにしてきた。児童の中から「算数がおもしろくなってきた。算数と友達になれた。」というような声が聞かれた。ただ、そのような活動を取り入れていく時間がかかる。後半は時間が足りず、十分な操作活動をさせることができず、悔いが残っている。
- ・習熟度別学習が学習意欲向上に効果大きい。とりわけ、じっくりコースの子どもたちの意欲の向上が顕著である。算数の時間に足取り軽く自分の教室へ向かう、テストでは、「俺、今回結構取れたかも。」と嬉しそうに教師に話すなど、これらの姿が、今まで算数を苦手とし、あまり好きでなかったと言う児童に見られた変容である。(単に、習熟度別の効果だけでなく、O先生の人柄も大きく影響しているのだが・・・)
- ・算数の習熟度学習では、選択の機会に、子供の意見がダイレクトに反映され、かなり厳しかった。希望する人数により自分の指導が子供に評価されるからである。しかし、その厳しさがあったからこそ、授業改善に本気で取り組めた。特に低位の子どもたちは、自分のペースで学べるということから、不安感を持たずに学習に取り組んでいたようだ。普段ためいきばかりをつけていた算数の苦手な女子が、駆け足で算数に向かっていく姿があった。また、ワークテストで、50点以下を連発していた子供が、95点、90点をとり、「こんな点数久しぶりだあ。やったあ。」と喜んでいる姿があった。2学期以降の難易度が高い単元でも、高い成果が得られるように取り組んでいく。
また、習熟度にはどのような格差を出すことで、子どもたちに意欲面を向上させることができるのか、分かったこともあるが、分からないところも多い。2学期以降探っていきたい。
- ・ぐんぐんタイムによる小集団学習を行った。目的別に分かれているグループなので、自分がしたい学習を選択して臨んでいる。プリントをどんどん出すグループがあったり、個別指導を重視するグループがあったりした。どの子にも関心・意欲は見られるが、各グループの差を埋めるのが大変だった。習熟度と併行して行うべきか？どっちにしてもぐんぐんタイムの回数が少なかった。2学期以降増やしていきたい。
- ・かけ算の筆算の仕方を形式的に覚えるのではなく、2・3位数×1位数の計算はどうやって求めたらいいのか、自分なりのやり方を考えたり、友達と互いに学び合ったりしながら学習を進めた。筆算形式理解と意味理解を結びつけながら、学習した。一人一人の学び方はずいぶん違うものだと一人一人の様子を見るほどに感じた。153×4のやり方を自分なりにじっくり時間をかけて考えていきたい子ども、やり方はもう分かったのでどんどんいろいろな問題に挑戦していきたいと考える子どもなど、いろいろな子どもがいた。今後は、子どもの学び方別のグループ学習を考えていきたい。
- ・算数の毎時間の授業の最後に、他の先生方に習って自己評価を書かせるようにしてみた。マークと言葉で表現させるようにした。想像していたよりも、児童は様々な授業の感想や分かったこと、難しかったことなどを自分の言葉でまとめていた。その記述を読む中で、「授業のここが分かりにくかった」とか、「この児童は今日のポイントをよく理解できていない」などということが分かった。これを次の授業で補習したりして、生かしたりすることができた。児童も感想を書く時間を楽しみにしている。
- ・4月当初、1学期に学習する内容と評価の観点を子どもたちに示した。学期末に子どもたちの意識調査をした。「ノートを見やすくとりたい。」「グループで協力して学習をしたい」など、子どもたちの願いが伝わってきた。「簡単な実験を毎回入れてほしい(生活の中から楽しい理

科の話をしてほしい)」という要望が75%にのぼった。授業を分かりやすくすることで学習意欲は高まると信ずる。発問や板書の工夫を心がけたい。

- ・ 「子どもの自己評価に基づき、次時の授業構成の変更」が一般的になった。ねらいに対して、子どもがどのような評価を下すのか、どれくらい達成できたのか。自己評価はそれを見定める一つの資料になる。 の児童が多い場合、次の授業には進まない。 が多いならば、発展的な内容へと進む。子どもの判断を大切にしてきた。これからも継続していく。
- ・ 国語を中心に音読するように心掛けてきた。繰り返し音読することによって文章の内容をしっかりと読み取ることができるようになるということを実感している。終会で音読をする時間を設け、取り組んできた。声を出して読むことに抵抗感がなくなり、学習中でははっきりとした声で読める子どもが増えている。
- ・ 研修で学んだ他の先生の行った実践（一文から文章を作る）を、自分の学級の実態に合わせて取り組んでみた。今までと違った方法で、子どもたちの作文を書きたいという気持ちを引き出すことができたようで、どの子も自分の気持ちが書いてあり、文章量も増えた。一文を書いたカードを並べたときに「こんなに長くなったよ。」と、満足する声が聞かれた。
- ・ 家庭科の製作では、個々の児童の製作したい物が多様であった。個々の児童の身に付けている技術も異なるが、児童の作りたいという意欲を持続させるためにも指導者を多くしようと考え、学習支援ボランティアとともに学習を進めた。その結果、質問できる人がたくさんいたので、児童は意欲をもって製作にあたることができた。完成したときは、製作物を抱きしめて離さなかったり、「家の人に早く見せたい」「早く使いたい」と言ったりするなど、達成感・満足感の高さがうかがえた。
- ・ 音楽
合奏では、交代で楽器を担当するなど、できるだけ大勢の子どもが、いろいろな楽器に触れることができるよう心がけてきた。また、グループごとに練習し、発表する形態を主に中学年で取り入れてきた。話し合いながら協力して楽しそうに練習する姿が見られた。これからも、できるだけ子どもたちが主体的に活動できる時間を生み出し、学習意欲を高めることができるようにしていきたい。
- ・ ぐんぐんタイムは、とてもありがたい学習展開だ。ただ、そのグループに満足しているかどうかの見極めが難しいところだ。
- ・ ぐんぐんタイムをとても喜んでいた（1年生）。いつも一緒に学習している仲間だけでなく、隣のクラスと混ぜり合っている時間は、競争心が芽生えたようだ。これからも続けてほしい。
- ・ ぐんぐんタイムで計算のコツをつかみ、できるようになった。先生方には手のかかることも多かったと思うが・・・
- ・ 完全学校週5日制で学力低下が心配される中、先生方がいろいろな工夫した指導をされていてありがたかった。
- ・ 大変恵まれた環境だと感謝している。子どもたちが生き生きと活動しているようだ。分かるまでやってみようという気持ちが少しずつ出てきたように思う。
- ・ 学校で分かりやすく教えていただき、家で復習できるといいと思う。
- ・ ぐんぐんタイムのようにグループに分かれて行う授業はとてもよいと思う。日頃「分からないことを分からないままにしない」と子どもに言っているが、本人一人ではどうにもならないところがあるので、学習によって先生が替わるのも子どもにとってはよい緊張感生まれると思う。